

P1-052

計画手術を受ける子どもに対する情報提供内容の検討

三宅 香織<sup>1</sup>、服部 淳子<sup>2</sup>

<sup>1</sup>元愛知県立大学 大学院 看護学研究科

<sup>2</sup>愛知県立大学 看護学部

【目的】

計画手術を受ける子どもに対する説明は、手術や麻酔の目的、術前や術後に体験することとその理由などを伝える必要があると言われている。しかし、現在は、保護者の意向や医療者による臨床的な直感に基づいて決定されていることが多く、子どもの不安を軽減するための情報提供が不足していると考えた。そこで、計画手術を受ける子どもの不安を軽減するために、どのような内容をどのように提供すべきであるかについて検討することを目的とし調査を行った。

【方法】

対象者は、2017年3月～4月に小児看護専門看護師のうち「病院」登録の132名とした。調査内容は、先行研究を参考に、3～8歳の子どもに対する手術に伴う入院、全身麻酔、術前および術後に体験することとその理由に関する術前の情報提供内容とその必要性についてであり、具体的な表現方法を例示し調査した。質問紙は研究者が作成し、その適切性は小児看護専門家のスーパーバイズを受けた。データ収集は、郵送式による無記名自記式質問紙調査とした。回答は4段階で求め、「必要である」4点、「やや必要である」3点、「あまり必要ではない」2点、「必要ではない」1点とし、わからない対象から除外した。平均3.0以上の項目は、情報提供の必要性に関する同意が得られたと判断した。なお、本研究は、所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

回収された質問紙は47部(回収率35.6%)であった。属性は、看護師経験年数は平均(SD)17.7(6.5)年、小児看護専門看護師認定後の経験年数は平均(SD)3.4(2.7)年であった。手術に伴う入院、全身麻酔および術前に体験することと理由に関する項目は、全て平均3.0以上であり、70%以上が「やや必要～必要」の回答であった。術後の項目のうち、入院中に子どもが体験することと理由に関する項目は全て平均3.0以上であり、70%以上が「やや必要～必要」の回答であった。術後の項目のうち、術後の初回外来日の説明をする項目は平均2.8、「やや必要～必要」の割合は59%であった。それ以外の退院後に関連する内容は平均3.0以上であった。

【考察】

調査の結果、計画手術を受ける子どもの不安を軽減するために、3～8歳の子どもであっても手術に伴う入院、全身麻酔、術前および術後に体験する情報の提供を行う必要性が示唆された。また、術後の初回外来日の説明については、必要性の認識が低かったことから、説明時期を検討する必要が示唆された。

P1-053

急性期病院における子ども療養支援士の役割

藤川 由紀子、橋本 亜友子

済生会川口総合病院 看護部 小児病棟

【背景】

子ども療養支援士（以下CCS）とは、子どもの目線で療養生活をサポートする専門職である。長期入院の子どもたちに向けた活動が主であり、急性期病院で働いているのはわずか数名である。当院は小児病棟全37（一般小児25、NICU6、GCU6）床、入院が年間約1100名（新生児除く）の急性期病院である。入院児の平均年齢は3歳、平均在院日数は8.8日で、CCSは2名体制で支援を行っている。

【目的】

急性期病院におけるCCSの関わりから、役割と展望を検討する。

【方法】

2018年度のある1か月間の入院児のうち、新生児を除く72名を対象にCCSの子どもとの関わりの内容を集計し、実態を調査した。尚、倫理的配慮の観点から記載内容については、カルテをもとに後方視的に検討を行い、個人が特定できないようにしている。

【結果】

72名の入院理由の内訳は、呼吸器系疾患26名、川崎病7名、IgA血管炎2名、手術8名、検査と虐待（一時保護）がそれぞれ3名、その他23名であった。また、CCSが関わった延べ件数は362件となった。関わりの内容は遊びが184件で、ディストラクション74件、プレパレーション24件、メディカルプレイ21件だった。一人当たりに関わった回数を入院理由別に平均すると、呼吸器系疾患3.8回、川崎病6.4回、IgA血管炎12.5回、手術3.3回、検査入院3.0回、虐待（一時保護）13.0回、その他5.2回であった。

【考察】

疾患構成は急性期病院としての性質を反映していた。特に虐待症例もいることは特徴的であると思われる。遊びは全ての子どもに対して信頼関係を築き、次の関わりに繋ぐ重要な役割を担うため、突出して件数が多くなったと考えられる。同様にディストラクションも年齢を問わず実施するため、遊びに次いで多くなったと思われる。当院の平均年齢と平均在院日数を考慮すると、慣れない環境や親との分離に対する不安や恐怖に焦点を当て、子どもが安心して過ごせることを目的とした関わりが重要である。そこからメディカルプレイやプレパレーションに繋ぎ、それぞれの子どもの状況に合わせた関わりが求められたことがうかがえる。また、関わりの件数は入院日数が長いほど多くなったと考えられる。

【結論】

入院期間や疾患に関わらずCCSは支援を行うが、それらを数値化することで必要とされる支援の内訳を明らかにすることができた。今後は活動の効果を客観的にするため、CCSC-IPなどの指標を用いて統計を取り、急性期病院におけるCCSの役割を検討していきたい。